

「教養小説」としての『ある婦人の肖像』

岡 崎 薫

(人文学部英文学研究室)

The Portrait of a Lady as Bildungsroman

Kaoru Okazaki

(Department of English, Faculty of Humanities)

最初に、『ある婦人の肖像』⁽¹⁾ (*The Portrait of a Lady*, 1881) というジェイムズ (H. James) の長編小説は一体、どのようなジャンルの小説に属するのかを問う事により出発したい。この問に関しては作者ジェイムズ自身の言葉が多いに参考になる。彼によれば、『肖像』という小説は「運命に直面するある若い婦人」 (“a certain young woman affronting her destiny”)⁽²⁾ であるイザベル・アーチャー (Isabel Archer) の「性格に対する私の認識」 (“my grasp of a single character”)⁽³⁾ を表明した小説である。そしてジェイムズの言うとおり、この小説はヒロインのイザベルが彼女に対して与えられた苦しい試練の運命に直面し、その非常なる苦悩を体験する事によって内面的、精神的な成長を遂げる物語である。このような種類の小説は、「主人公の精神発達乃至人間形成を主題とする小説」⁽⁴⁾ であると定義されている「教養小説」(ビルドングスroman) に属するものである。以下この論考においては、『肖像』における「教養小説」的な要素に着目して、若きアメリカのヒロイン、イザベル・アーチャーが、いかに彼女の精神的発達を遂げるかという彼女の自己発展の軌跡をたどる事にする。

本論に入る前に、結論に達するための議論の手順を明確にしておきたい。『肖像』が「教養小説」であるとする前提に留意しつつ、第一に、この小説に関して無数と言えるほどの批評の中から年代順に代表的な批評家の見解を検討し、その凡その動向を把握する事を試み、第二に、この小説の形式すなわち構成上の特徴を内容との関係の上で考察し、そして第三に、イザベル・アーチャー自身の内面の成長の軌跡を結論として論じる。

1

(1)1940年代の批評——F. R. Leavis

『偉大なる伝統』(*The Great Tradition*, 1948) の中で、リーヴィスは、この小説が「英語の小説の中で最も偉大なもののうちの一つ」 (“one of the great novel in the language”)⁽⁵⁾ と言っている。そしてこの批評家の胸を多に打った点は、ヒロイン、イザベル・アーチャーの「性格」の中に根ざす「すばらしい道徳感」 (“a supreme moral value”)⁽⁶⁾ であり、また「アメリカ女性のすばらしさ」 (“the supremacy of the American girl”)⁽⁷⁾ である。このようなリーヴィスの見解は十分に説得力があるが、『肖像』全体を視野に入れた批評としては幾分不十分な感じが伴う。それは一体どこに原因があるのだろうか。

この『肖像』が作者ジェイムズ自身の言葉にあるように、又、リーヴィスが指摘しているような「性格」を持つヒロイン、イザベル・アーチャーが「運命に直面する」物語であるとするならば、イザベルの「性格」のみを論じている批評は片手落ちである。「性格」を議論すると同時に、与えられた「運命」に対して、イザベルがどのように対処し、それが彼女の内面にどう作用するのかを

見なければ十分な批評とはなり得ない。それ故に、イザベルの「性格」分析のみが顕著なりーヴィスの『肖像』論には限界があると言わざるを得ない。

(2)1950年代の批評——D. V. Ghent, R. Chase

гентは、*The English Novel* (1953) の中で参考になるところが多い『肖像』論を展開している。彼によるとこの物語は、「イザベルの人生探求」(“Isabel’s quest of life”)⁽⁸⁾であり、イザベルの「発達する意識がテーマ」(“the theme of the developing consciousness”)⁽⁹⁾と考え、作者ジェームズのこの小説創造の中心が、イザベルの「意識の成長」(“the growth of a consciousness”)⁽¹⁰⁾にある事を指摘している。しかしながらгентの批評の弱点は、イザベルの内面的成長の軌跡が、「経験」(“experience”)と「苦悩」(“suffering”)を通して人生と人間性に対する「洞察力」(“insight”)獲得のための人生探求の過程であった⁽¹¹⁾、と一般化しすぎている点である。この小説全体に対する枠組としての「教養小説」の視点を示唆するこの見解は実に適切なものであるが、イザベルの「性格」に根ざす彼女の「特殊」な成長の軌跡の分析が不足しているのである。更に、『肖像』論の結論として、ローマに帰って行ったイザベルのその後のギルバート・オズモンド (Gilbert Osmond) との不毛な結婚生活のことをあれこれと推論している点は後味の悪さを感じさせるものである。この小説の終りの部分では、確かにいろいろな疑問が残された形で、それに対して作者ジェームズは何の直接明確な説明をしていないのであるが、小説に書かれていない世界の事を批評の対象とするのはどうであろうか。

гентの『肖像』論と同じく、チェイスの *The American Novel and Its Tradition* (1957) 中の『肖像』論の大筋は、この小説が一種の「教養小説」であることを示唆している。そしてチェイスは、ジェームズのこの小説はアメリカ文学の伝統的な「ロマンスと同質」(“akin to romance”)⁽¹²⁾なものであると指摘した上で、イザベル・アーチャーの物語を「エデンの園の神話」になぞらえて考察している。それをチェイス自身の言葉で図示すると次のようになる。⁽¹³⁾ Isabel’s Eve-like innocence → a fall (from innocence) → wisdom, maturity このような人生における成長の軌跡をたどるイザベルの「性格」についても、チェイスは分析を加え、イザベルの本質は「強情なアメリカ人の理想主義」(“perverse Yankee idealism”)⁽¹⁴⁾にあるとする。問題はこの“perverse”という形容語である。ちなみに C.O.D. (6th ed.) によると“Persistent in error”とあり、この語はあきらかに「まちがいが」、「過失」を含意する語であり、チェイスは鋭くイザベル・アーチャーの人生における「過失」の原因を考察するのである。彼女の生き方で問題となるのは、その基盤が「空想と読書の生活」(“a life of a fantasy and reading”)に置かれている点であり、その生活が「現実から掛け離れた生活」(“a life isolated from reality”)⁽¹⁵⁾であるという点である。「理想主義」というものが錯誤に墮すとすれば、それが「現実」から多いにそれてしまう場合であろう。この点イザベルは「まちがった考え方」(“a false theory”)⁽¹⁶⁾を抱いていたと考えるチェイスの主張は十分に説得力あると言える。「まちがった理論」を土台にして人生の理想を追求する事で現実から多いにそれるコースをたどるイザベルの行きつく先は明らかである。しかしながら、チェイスの批評の難点は、イザベル・アーチャーの「成熟」(“maturity”)という問題を考察しているものの、実際に彼女のどこが、どういうふうに「成熟」を遂げたのかという「教養小説」にとっての核心にまで考察を進めていない点である。

(3)1960年代の批評——M. Geismar, T. Tanner

ジェームズに対して非常に手きびしい批評を展開するガイスマーは *Henry James and the Jacobites* (1963) の中で、ヒロイン、イザベル・アーチャーは作者により「空想化され理想化され」(“romanticized and idealized”)⁽¹⁷⁾て、この小説が「ジェームズ流のロマンス」(Jamesian romance)⁽¹⁸⁾でありかつ「メロドラマ」(“melodrama”)⁽¹⁹⁾であると主張して、人生に対する「まじめ

な文学的表現としてはまったく不十分) (“completely inadequate as serious literary commentary”)⁽²⁰⁾だという結論を下している。この見解の基底には、イザベルによって代表される人間が不運にも誤りを犯し、その不幸な状態から脱出できないままにいるという悲劇がどうしても許せない (“it is totally inexcusable—isn't it?—to remain trapped”)⁽²¹⁾ というガイスマーの不満、いらだちが感じられる。この点は人間観についてのジェームズとガイスマーのどうしようもない隔たりなのかもしれない。

ガイスマー自身、この小説の前半と後半は「まったくちがう小説である」 (“a completely different novel”)⁽²²⁾ と認識しているにもかかわらず、後半におけるイザベル・アーチャーの苦悩の意義が十分に理解されていないのである。このイザベルの苦悩はまさしく不幸な状態からの脱出を模索しているが故のものではなかったか。このようにイザベルの人間としての未熟さのみを多に批判しているガイスマーの『肖像』論には承服できない点が多いのである。

“The Fearful Self” (1965) においてタナーは、『肖像』全体をきちんと視野に入れてこの小説が「教養小説」の一種である事を示唆する分析を行っている。タナーによると『肖像』の核心は、イザベル・アーチャーの「内面的探求」 (“the inner quest”)⁽²³⁾ であり、彼女の「自己発展」 (“self-development”)⁽²⁴⁾ である。更にタナーは、イザベルの人生探求が「自由、知識そして自己発見のための理屈の上での探求」 (“her theoretic pursuit of freedom, knowledge and self-realization”)⁽²⁵⁾ であると見なし、彼女の成長の軌跡をチェイスと同じように考察している。すなわち「ロマンチックで理屈ばい理想主義」を持つイザベルが「あやまり」 (“error”) を犯す事により自己を「発見」 (“discovery”) し「より真実の視野」 (“truer vision”)⁽²⁶⁾ を獲得するのである。そしてイザベルの「物の見方が変化した」 (“her way of looking has changed”) 故に彼女の心の中に「一つの良心が生まれ出る」 (“the birth of a conscience”)⁽²⁷⁾ と指摘している。しかし、この「良心」とは一体何を意味しているのか。このようにタナーの『肖像』論は全体的に十分説得力があるが、その結論がはなはだあいまいで抽象的である。

60年代のその他の批評の中で目を引くのは L. B. Holland と P. Buitenhuis の二人の批評家の『肖像』論である。前者は、イザベルの「自己発見の過程」 (“the process of self-recognition”)⁽²⁸⁾ がこの小説の中心であり、彼女が「人生に参入する事」 (“commitments to life”)⁽²⁹⁾ により「積極的な役割を演じる」 (“to play an active role”)⁽³⁰⁾ ためにローマに帰って行ったと指摘している。後者は、『肖像』という小説は「性格発展の小説」 (“a novel of character”) であると考えて、イザベルが「あの独特で個人的な主義を変更することを学ぶ事」 (“to learn to modify that individualistic doctrine”)⁽³¹⁾ が彼女の成長の内容の要点の一つであると指摘している。しかしながら、これらの批評においては、イザベルの「性格発展」に関しての分析が不十分であり、彼女の「性格発展」とはどのような内容であるのか明確にされていない。

(4)1970年代の批評——L. Auchincloss, G. H. Jones, N. Baym

ジェームズの文学活動の初期に属する作品の顕著な傾向は「国際テーマ」の小説であるが、オーチンクロスは *Reading Henry James* (1975) の中で、『肖像』は厳密な意味ではこの種の小説ではない (“*The Portrait of a Lady* is not, properly speaking, an international novel”)⁽³²⁾ とする。そして彼は、イザベルの「性格」の重要な要素として「ロマンチックな理想主義」 (“romantic idealism”)⁽³³⁾ があると指摘している。

オーチンクロスよりも更にイザベルの「理想主義」を前面に打ち出して『肖像』論を展開しているのがジョウンズである。*Henry James's Psychology of Experience* (1975) の中でジョウンズは、「イザベルは理想主義者である」 (“Isabel is an idealist”)⁽³⁴⁾ と断言し、彼女の「理想主義」から「すばらしい道徳意識」 (“fine moral sense”)⁽³⁵⁾ が派生すると考える。この小説の最後の場面に関して、「積極的に生きてゆくために」 (“to live not merely to exist”)⁽³⁶⁾ ローマ

に帰ったこのイザベルの行動を「成熟するイザベルの成長」(“Isabel's growth to maturity”)⁽³⁷⁾の結果であると考えて、この時点でのイザベル・アーチャーは「経験、情け、苦悩そして真実」(“experience, feeling, suffering and truth”)に根ざした「積極的な理想」(“active ideals”)⁽³⁸⁾を抱くほどまでに成長を遂げたと指摘している。イザベル・アーチャーの「理想主義」を多に積極的に評価するジョウンスのこの『肖像』論はこの小説を研究する場合に見逃がせない論文である。

『肖像』についてその初版本(1881)と改定版(1908)との語句、文章などのちがいを詳細に比較研究しているのがベウムによる“Revision and Thematic Change in *The Portrait of a Lady*”(1976)である。ベウムによると、初版よりも改定版の方が、「イザベル・アーチャーの内面的な生活」(“Isabel Archer's inner life”)⁽³⁹⁾に対するジェームズの関心を強く反映しているし、ヒロイン、イザベルについては、彼女が「ロマンチックな理想主義者」(“the romantic idealist”)⁽⁴⁰⁾であり、「ジェームズはイザベルの理想に共鳴している」(“James sympathises with Isabel's ideals”)⁽⁴¹⁾と指摘している。

(5)1980年代の批評——A. M. Wright, V. C. Fowler

『肖像』に関するさまざまな批評の動向は80年代に入ってもその大筋は変化しない。*The Formal Principle in the Novel* (1982)においてライトは、『肖像』とは「イザベルの道徳の進展」(“moral evolution on Isabel's part”)⁽⁴²⁾の物語であると主張している。

この小説が「イザベルの成長」(“Isabel's growth”)⁽⁴³⁾の物語であると考えたファウラーの*Henry James's American Girl* (1984)の中『肖像』論もこれまでの批評家たちのものと大差はないのだけれど、イザベルが「否定的」(“negative”)な状態から「肯定的」(“positive”)な状態へと「変貌」(“transformation”)⁽⁴⁴⁾して結局彼女は成長を遂げて「十分に人間的に生きるために苦しい試練が与えられたのだと信じるようになった」(“she has come to believe that suffering is the necessary condition of being fully human”)⁽⁴⁵⁾という結論を出している点、『肖像』全体を視野に入れた適切な解釈である。

以上、1940年代から80年代までのさまざまな批評家たちの『肖像』論を検討してきたが、一つの動向としてそれらの批評が、『肖像』という小説は一種の「教養小説」だ、という事を示唆しているのである。以下残された手順としては、実際に作品自体を検討する事により、『肖像』が「教養小説」である事を論証し、そしてヒロイン、イザベル・アーチャーの「性格」のどの部分がどう「成長」して行くのかを論じなければならない。

2

『肖像』の構成上の特徴はさまざまな鋭敏な批評家たちの指摘を待たずとも容易に理解できるほどはっきりしている。それは第一に前半部分と後半部分にはっきり二区分される点である。前半は第1章から、イザベルがオズモンドとの結婚をついに決意するまでの第35章までであり、後半は、その後3年半から4年くらいの時間的空白があり、オズモンド夫人としてイザベルが登場する第36章から終りの第55章である。この小説全体の構成上の特徴を繰り返してまとめ整理するために、ここにあえてミレット(F. B. Millet)の見解を引用しておく。

One of the most striking features of the structure is the sharp break caused by the lapse (between chapters XXXV and XXXVI) of three and a half or four years between the events leading up to Isabel's marriage and the events that reveal its consequences.⁽⁴⁶⁾

ミレットの指摘にもあるように構成上のこの顕著な特徴は疑問の余地がないと思えるほどである。

またミレットは、小説構成の上で第35章と第36章との間に3年ないし4年の時間的な空白を設定する事により、ジェイムズはこのような仕方ですべて「内容」面での効果を多めに高めていると指摘する。

James has been able to get the very telling effect of juxtaposing two similar, and yet vastly different, "portraits" of his lady. (47)

ジェイムズは一冊の本の中でいわば「二つの肖像画」を描ききった事になるのであるが、この「二つの肖像画」について更に検討しなければならない。

作者ジェイムズ自身が、『肖像』とは自分のヒロインの「性格に対する認識」の表現であり、その「若い婦人が運命に直面する」姿を描いた小説であると考えていた事はすではじめに指摘した点であるが、実際に完成された作品の構成も作者のこのような意図を反映した形で配置されている。ミレットの指摘にもあるが、この作品の第6章のはじめの部分は「イザベル・アーチャーの性格」についての作者ジェイムズ自身による「異常とも思えるほどの公然たる詳細な分析」("the unusually overt and extended analysis")⁽⁴⁸⁾であり、ヒロインの「性格規定の章」である。そして後半の第42章においてきびしい「運命に直面した」イザベルの獲得した認識の地平が13ページにもわたって克明に描写されているのである。こうして第6章で徹底的にイザベルの「性格」分析がなされるこの小説の前半の部分は、彼女が自分の成長過程における決定的な試練を経験する以前の「一つの肖像画」であり、後半はイザベルの人生の幸福という点からすると致命的であると思われるオズモンドとの結婚という過酷な試練に直面し、それを乗り越えようとするイザベル・アーチャーの「もう一つの肖像画」なのである。このようにして前半の第6章でヒロインの「性格」分析で、一つのアクセントをつけて、第35章と第36章との間の時間的な空白により前半・後半の区切りを明確に示し、そして後半の第42章においてヒロインの内面的成長の跡を示唆する構成の配置によってジェイムズは「二つの肖像画」を完成させているのである。もしも『肖像』が「教養小説」であるとするならば、「無垢でロマンチックな」ヒロインが大変な試練を体験する事により「成熟」する内容の物語でなければならないし、この点は実際に今述べた構成上の特徴からも十分に裏づけられているのである。小説の構成という「形式」面と、小説の「内容」面がぴったりと合致しているのがジェイムズ作「二つの肖像画」の特色である。

3

ルウィス (R. W. B. Lewis) は *The American Adam* (1955) の中で、ジェイムズの小説のパターンは「アダムの経験の独特なアメリカリズム」("the peculiar American rhythm of the Adamic experience")⁽⁴⁹⁾を反映していると指摘している。その内容を彼の言葉を使って図示すると次のようになる。the birth of innocent → the unknown world → the collision with that world → "the fortunate fall" → suffering → the wisdom and maturity このような成長の過程をたどる主人公を描いた小説はまぎれもなく「教養小説」に属するものである。以下、実際に『肖像』とはどのような「教養小説」の内容を持っているのかを考察する。

この小説の第6章は、ヒロイン、イザベル・アーチャーの「性格規定の章」であるが、作品をよく読んでみると、イザベルの「性格」に関するジェイムズの分析は特に彼女の「性格」上の弱点に集中している事に気がつく。最初からヒロインが完全無欠ですでに完成された人格であるならば「教養小説」たり得ないのであるから、この点小説の初めの部分でヒロインの弱点を描くのは当然の事であろう。

そもそもイザベルの「性格」上の欠陥とは何か、それを検討しなければならない。ジェイムズに

よると「多くの考えを持っている若い人」(“a young person of many theories,” 48)⁽⁵⁰⁾がイザベル・アーチャーであるが、「彼女は世間の邪悪さをほとんど知らなかった」(“she had seen very little of the evil of the world,” 50)のである。現実の世界を直視するのではなくて理屈ばかりが先走るのが「無垢」(悪く言えば「無知」)な彼女の欠点の一つであった。このような欠陥にもかかわらず、ジェイムズはイザベルの「よりすばらしい精神」(“a finer mind,” 48)と「より大きな知性」(“a larger perception,” 49)を評価している。しかし、このイザベルの長所も彼女の世間に対する見方があまりにも楽観主義的な「固定観念」(“a fixed determination to regard the world as a place of brightness of free expansion, of irresistible action,” 49—9)となってしまうので彼女の行動における判断の指針としてはそれほど効力がないのである。こうしてイザベルは「乏しい証拠により自分が正しいのは当然であると思う習慣」(“the habit of taking for granted, on scanty evidence, that she was right,” 49)を身につけて、「大変な試行錯誤」(“a thousand ridiculous zigzags,” 49)を繰り返す事になるのである。しかし確かに「性格」的な弱点は存在しているものの、イザベルの生き方はある一つの主義のもとに一貫している。そのある一つの主義とは彼女の「理想主義」である。

イザベルは常に「自分の発展の事を考え、自分が人間として完成する事を願い、自分の進歩を観察している」(“planning out her development, desiring her perfection, observing her progress,” 52)し、結婚相手の選択においてもこの彼女の「理想主義」は断固として一貫している。自分の「理想」に照らして結婚相手を選択しようとし、更には自分の「理想」に照らして世間一般について思いをめぐらす態度が、彼女の「性格」の上で顕著な特徴となっている。このような彼女の生き方は危険である。ジェイムズもその危険性を「高貴なる魂の危険」(“the danger of a high spirit,” 50)と指摘しているのである。

こうしてイザベルは「理想主義の危険」を犯し、苦し運命の中で「一人のもろい犠牲者」(“an easy victim,” 50)となって行くのである。この点については、彼女の「理想主義」そのものよりはむしろ「理想主義」が現実の世界と非常に掛け離れた「無垢」な一人の若いアメリカ娘の心の中に主観的、独断的に設定されたところに、悲劇の原因があるのである。

そしてイザベルの悲劇の原因はすでに前半の第6章において暗示されているのであり、つらい試練に直面しそれをなんとか乗り越えようと苦悩するイザベルの姿、それが後半の核心である事はすでに述べたが、では一体彼女は苦悩を経験する事によりいかに変貌して行くのか、それが問題なのである。

オズモンドの妹ジェミニ伯爵夫人に言わせると、イザベルは「無垢なる無知」(“innocent ignorance,” 542)そのものであるが、このような人間としての弱点、未熟さをじょじょに克服して行くイザベルの姿が、この小説の後半の最大の見物である。オズモンドとの結婚が失敗であった事を確認し現在の自分の置かれた状況とこれから先未来の自分の人生の事などを、明け方近くまでただ一人でじっと瞑想しているイザベルの第42章における姿は、「成長」へ向けて歩みはじめた姿であるのだ。オズモンドとマール夫人(Madame Merle)の「邪悪さ」を思い知らされた後のイザベルは彼女のこれまでの「無垢」な認識を確かに修整して行くのである。

第6章で詳細に分析された人間世界に対するイザベルのこれまでの楽観主義に代って暗い「悲観主義」の影がしのび寄る。彼女は夫のオズモンドに対して「深い不信感」(“the deep mistrust,” 423)を抱くようになる。この「夫に対する疑惑」(“her deep distrust of her husband,” 424)は「夫の存在そのもの」(“her husband's very presence,” 424)に根ざしているが故にぬきさしならぬ不信感なのだ。この時点で彼女は自分がやはり「失敗した」(“the feeling of failure,” 424)事を認めざるを得ない。彼女自身、心の中で、自分は配偶者の選択、すなわち女性にとって人生の

一大事の選択において判断をあやまった事を悟るのである。そして夫に対する「不信感が世界を暗くしていた」（“this was what darkened the world,” 424）のであるが、この暗さはイザベルがあのだーゲンコートの大邸宅に最初姿を見せた時の明るさ、「楽天主義」とは大変なちがいである。

しかしイザベルのこの「暗さ」は、彼女の周囲の世界を彼女の目がしっかりと凝視しはじめた結果なのである。まさに彼女の「成長」を示唆するものである。オズモンドに関して彼女は最初「彼の本質のたった半分しか見ていなかった」（“she had seen only half his nature,” 425）のであるが、今や「彼女は彼の全体を見た」（“she saw the whole man,” 525）のである。そして彼女は「見せかけの理屈」（“a factitious theory,” 427）によって自分は結婚したのではないかと、失敗の原因がそこにありわしなかと自問自答する。そしてイザベルのこの暗い世界をこれから先照らして行くのが「深まってゆく経験の光」（“the light of deepening experience,” 487）である。

こうしてイザベルは人生における大変な失敗をするのではあるが、その代償として彼女は「経験の光」を得て周囲の世界がとても良く見えるようになったのである。それと同時に彼女が得たものは、他人に対する「寛大さ」である。この点は彼女のいとこラルフ（Ralph）に最後に会うために出かける時の彼女の感情に暗示されている。病気が悪化した重態のラルフに、もう二度と会う事はできないかもしれないと思うイザベルは「これまで決して知らなかったやさしさを彼に対して感じた」（“this gave her a tenderness for him that she had never known before,” 433）のである。他人に対する「やさしい寛大な」配慮、それはこれまでのイザベルの心の中には存在しなかったものである。この点は第6章における「イザベルはしばしば自分自身がまったくのエゴイストだと思う」（“Isabel often thinks herself as a rank egoist,” 52）態度に暗示されている。このようにしてイザベル・アーチャーは確かに成長して行くのである。

イザベルの成長の過程で無視できないのがオズモンドの娘パンジー（Pansy）の存在である。ミレットは、パンジーに関して、彼女は「判断力がしっかりしている」（“a reliability of judgment,”）し、この点が「不運にもイザベルには欠如していた」（“in this matter Isabel unfortunately lacked,”）⁽⁵¹⁾と指摘している。多くの批評家たちとはちがひ、パンジーの肯定的な側面をも見逃がさないミレットの見解は参考になるのである。パンジー・オズモンドとは何物か。そしてイザベルの成長過程で一体彼女はどのような役割を演じているのであろうか。

パンジーは「とても無垢で幼い」（“so innocent and infantine,” 277）娘であり、「何と素朴で、自然な感じで無垢である事か」（“how simple, how natural, how innocent,” 314）とジェイムズは説明する。この点彼女は「無垢」なイザベルと非常に良く似た内面を持つ娘である。そしてイザベル同様彼女も「運命のもろい犠牲者」（“an easy victim of fate,” 315）になりそうだとジェイムズは分析する。「無垢」であるし「もろい犠牲者」でもあるという二つの点で、パンジーはイザベルと同じ内面的特徴がある。ただしパンジーについては、彼女がイザベルとは比較にならないほど無力な存在である事も確かである。父オズモンドに絶対的に服従するようにとしつけられたパンジーではあるが、ミレットの指摘のとうり、「無垢」なイザベルには見られなかったパンジーのしっかりした人間としての英智を見落してはならない。彼女は「まちがいを回避する小さなすばらしい本能」（“small exquisite instincts for avoiding a mistake,” 315）があるし自力では何一つできない無力な存在に見えるのだけれど「いつ、どこで、しがみつつかを知っている」（“in knowing when and where to cling,” 315）点が彼女の強みである。

そしてパンジーはアメリカ青年エドワード・ロウジア（Edward Rosier）を恋していて、父オズモンドからは絶対許されないと知りながらも断固として、ロウジアに対し「絶対にあなを

あきらめたりしないわ!」(“I’ll not give you up — oh no!,” 386)と断言しているのである。そして彼女との結婚を絶望視する青年に対して「私たちはしんぼうしなければいけないわ」(“we must have patience,” 386)と勇気づける事さえもできるのである。イザベル以上に「無垢」で無力に見えるパンジーではあるが、実のところ彼女はイザベルにはない「強み」を持っている。この点をジェームズは「彼女は自分自身で判断し、現実を見てきていた」(“she judged herself; she had seen the reality,” 556)と分析している。

イザベルにとってパンジーは一番身近な心を許せる存在であるし、パンジーの「無垢」で「無力」ではあるが人間としての「力強い英智」に、非常に繊細な感受性を持つイザベルが気がつかないはずはない。これまでの「無垢」なイザベルに欠如していたものは、このパンジーの人格に見られる、現実をしっかりと踏まえた判断力と認識であったのだ。こうしてパンジーは、イザベルの弱点をイザベル自身にしっかりと確認させる点で、イザベルの成長過程において非常に重大かつ積極的な役目を果たしているのである。

今やイザベルにとっては、愛すべきパンジーの存在はなくてはならないものであるし、多くの批評家たちが指摘しているように、パンジーのためにイザベルはローマに帰って行く事を最後に決意したと考える事は十分根拠があるが、しかしながらそれがすべてだとは思えない。夫オズモンドに対し、パンジーの存在はこれまでどうり無力なものであるし、ローマにおけるオズモンドとの生活は暗い絶望的なものである。結局イザベルは結婚という束縛から脱出できなかったのであろうか。とにかく、この小説の一番最後の場面においては、「何故にイザベルはローマへ帰って行ったのか」という疑問を誰もが感じるはずである。

この疑問に対する答としてパンジーの存在も無視できそうもないけれども、その時点におけるイザベル自身の内面的な状態にもっともっと注目しなければならないと思う。この時のイザベルは以前の「無垢」なイザベルではなくて、「成長」し「経験の光」に照らされているイザベルである。この点をジェームズは、「彼女はどこへ行けばよいかわからなかったが、今やわかった。大変まっすぐな道があった」(“She had not known where to turn; but she knew now. There was a very straight path,” 591)と分析している。イザベル・アーチャーはこれまで一人の人間としてあくまでも自分の理想に忠実に生きて来たのであるし、これから先もこの理想に従って生きていけば、それこそ「道はまっすぐ」なものになるのである。ただし、この彼女の「理想主義」は以前のものとは少しその質がちがう。これまでの彼女の「理想主義」はロマンチックで、ただ頭の中の理屈のみに寄りかかっていた事はすでに検討してきたが、成長したイザベルの「理想主義」は彼女が成長する過程において次元のちがうものに変化してきているのである。

イザベルは人生の苦しい試練を体験し、いとこのラルフのあくまでも寛大な態度に学び、他人に対して「やさしい寛大な配慮」をする事を身につけ、またパンジーの人間としての「英智」に学び、「経験の光」に照らされて今や自分の置かれた現実をしんぼう強く判断できるのである。そしてこの「経験の光」で暗い彼女の未来を照らすべくローマに帰る。仮りに夫オズモンドが「邪悪さの権化」であるとしても、あえてそれさえも包み込もうとするより高い次元の彼女の一貫した「理想主義」がそこに貫徹されているのである。

このようにして、「無垢」から「成熟」へ、イザベル・アーチャーは彼女の「性格」の核心である「理想主義」をより進展させながら精神的成長を遂げるのである。そしてこの小説全体を視野におさめる「教養小説」という枠組は、物語の中の「幽霊」の挿話からしても明らかである。はじめラルフから「君のように若くて幸せで無垢な人」(“a young, happy, innocent person like you,” 47)には「幽霊」は決して見えないし、それを見るためには「君は多に苦悩し、みじめな知恵を手になければならない」(“You must have suffered first, have suffered greatly, have gained

some miserable knowledge," 47) と聞かされるイザベルが、結局「幽霊」が見える一人前の人間に成長するのである。そしてジェームズによれば、「イザベルは明らかに（幽霊を見るための）必要条件を満たした」("She apparently had fulfilled the necessary condition," 578) のであった。

<注>

- (1) この論考においては、『肖像』と略記する。
- (2) H. James, *The Art of the Novel* (Charles Scribner's Sons, 1962), p. 48.
- (3) *Ibid.*, p. 47.
- (4) 川本静子、『イギリス教養小説の系譜』（研究社、1973）、p. 8.
- (5) F. R. Leavis, *The Great Tradition* (Penguin Books, 1972), p. 147.
- (6) *Ibid.*, p. 167.
- (7) *Ibid.*, p. 170.
- (8) D. V. Ghent, *The English Novel: Form and Function* (Harper Torchbooks, 1961), p. 214.
- (9) *Ibid.*, p. 217.
- (10) *Ibid.*, p. 216.
- (11) *Ibid.*, p. 215.
- (12) R. Chase, *The American Novel and Its Tradition* (Doubleday Anchor Books, 1957), p. 118.
- (13) *Ibid.*, p. 124.
- (14) *Ibid.*, p. 121.
- (15) *Ibid.*, p. 122.
- (16) *Ibid.*, p. 130.
- (17) M. Geismar, *Henry James and the Jacobites* (Houghton Mifflin, 1963), pp. 40-1.
- (18) *Ibid.*, p. 42.
- (19) *Ibid.*, p. 43.
- (20) *Ibid.*, p. 47.
- (21) *Ibid.*, p. 45.
- (22) *Ibid.*, p. 43.
- (23) T. Tanner, "The Fearful Self" in *Twentieth Century Interpretations of The Portrait of a Lady* (Prentice-Hall, 1968), p. 68.
- (24) *Ibid.*, p. 69.
- (25) *Ibid.*, p. 70.
- (26) *Ibid.*, p. 74.
- (27) *Ibid.*, p. 82.
- (28) L. B. Holland, *The Expense of Vision: Essays on the Craft of Henry James* (Princeton Univ. Press, 1964), p. 4.
- (29) *Ibid.*, p. 42.
- (30) *Ibid.*, p. 53.
- (31) P. Buitenhuis, "Introduction" to *Twentieth Century Interpretations of The Portrait of a Lady* (Prentice-Hall, 1968), p. 9.
- (32) L. Auchincloss, *Reading Henry James* (University of Minnesota Press, 1975), p. 67.
- (33) *Ibid.*, p. 66.
- (34) G. H. Jones, *Henry James's Psychology of Experience* (Mouton, 1975), p. 46.
- (35) *Ibid.*, p. 50.
- (36) *Ibid.*, p. 51.
- (37) *Ibid.*, p. 51.
- (38) *Ibid.*, p. 51.
- (39) N. Baym, "Revision and Thematic change" in *Henry James: Washington Square and The Portrait of a Lady* (Macmillan, 1984), p. 184.

- (40) *Ibid.*, p. 201.
- (41) *Ibid.*, p. 200.
- (42) A. M. Wright, *The Formal Principle in the Novel* (Cornell University Press, 1982), p. 204.
- (43) V. C. Fowler, *Henry James's American Girl: The Embroidery on the Canvas* (The University of Wisconsin Press, 1984), p. 67.
- (44) *Ibid.*, p. 72.
- (45) *Ibid.*, p. 80.
- (46) F. B. Millett, "Introduction" to *The Portrait of a Lady* (Modern Library, 1966), p. XVI.
- (47) *Ibid.*, p. XVII.
- (48) *Ibid.*, p. XVIII.
- (49) R. W. B. Lewis, *The American Adam: Innocence, Tragedy and Tradition in the Nineteenth Century* (The University of Chicago Press, 1968), p. 153.
- (50) H. James, *The Portrait of a Lady* (Modern Library, 1966). 以下の引用文の後の数字はすべてページ数を示す。
- (51) Millett, *op. cit.* p. XVII.

(昭和60年9月26日受理)

(昭和60年12月20日発行)